

ira

ay sa

of の la

sta

# KOKUGAKUIN ZASSHI

THE JOURNAL OF KOKUGAKUIN UNIVERSITY

---

Volume CVIII

November 2007

Number 11

---

Problems in Japanese Linguistics

---

KOKUGAKUIN UNIVERSITY

Shibuya Tokyo Japan

釘貫 亨 名古屋大学教授  
 鈴木 一 本学兼任講師  
 近藤 泰弘 青山学院大学教授  
 山内 洋一郎 奈良教育大学名誉教授  
 吉田 永弘 本学准教授  
 川上 葵 本学名誉教授

久野 マリ子 本学教授  
 中村 幸弘 國學院大學栃木短期大学教授・  
 本学名誉教授  
 小林 國雄 日本国語教育学会常任理事  
 諸星 美智直 本学教授  
 泉 文明 龍谷大学准教授

### 編集後記

國學院雜誌では、十一月号を特集号に充てて前年度から編集企画をすることが定着している。平成十六年度は近代文学、平成十七年度は中国学、平成十八年度は国学の特集であった。日本語学（国語学）が特集号編集を担当するのは、前回、平成十三年に担当して以来のことではあり、また本年は國學院大學創立百二十五周年の節目の年にあたり、それに際して特集号編集の任に当たる日本語学スタッフ一同、意気軒昂、企画にあたった。時あたかも、「国語学」から「日本語学」へと名称が変更され、新しい学問が模索されている。そこで「日本語学の諸問題」というテーマの下に、國學院大學の関係者は勿論、斯界で活躍していらっしやる方々に広く投稿を呼びかけて、ご賛同・ご投稿承諾の旨ご回答いただいた方に、ご執筆依頼を申し上げます。ご多忙のところを、力のこもったご論文を締切期日までにご投稿くださいました関係各位に心から御礼申し上げます。編集業務に精通しない私どもの不才・非力にもかかわらず、見事な特集号ができあがって、内容的にもエポックメイキングなものになっているだろうと自負しています。これもすべてご執筆くださった各位の賜物と感謝し、重ねて御礼申し上げます。

（遠藤和夫）

### 編集委員

大久保 一男 木原 志乃  
 白井 重範 高橋 大助  
 谷口 康浩 傳馬 義澄  
 宮内 克浩 茂木 栄  
 吉田 永弘

### 購読料

普通号 二〇〇円  
 特集号 不定  
 年間契約 三、一五〇円  
 （前納・消費税込）

（送料・特集号の増額とも）

平成十九年十一月十日 印刷  
 平成十九年十一月十五日 発行

國學院雜誌 第一〇八卷 第十一号

定価 一、〇五〇円（送料百五十六円）  
 編集者代表 大久保 一男  
 発行者 國學院大學  
 代表者 安蘇 谷正彦  
 印刷所 株式会社デイグ  
 発行所 総合企画部 広報課  
 東京都渋谷区東四丁目  
 郵便番号 一五〇八四四〇  
 振替 〇〇二〇・七・七七〇一

執筆者紹介

山口佳紀 聖心女子大学教授  
 工藤力男 成城大学教授  
 沖森卓也 立教大学教授  
 蜂矢真郷 大阪大学院教授  
 宮腰賢 東京学芸大学名誉教授  
 辛島美絵 九州産業大学教授  
 坂詰力治 東洋大学教授  
 小林賢次 早稲田大学教授  
 小林千草 東海大学教授  
 出雲朝子 青山学院女子短期大学名誉教授  
 土屋信一 共立女子大学非常勤講師  
 中道知子 大東文化大学准教授  
 岡崎正繼 本学名誉教授  
 釘貫亨 名古屋大学教授  
 鈴木一 本学兼任講師  
 近藤泰弘 青山学院大学教授  
 山内洋一郎 奈良教育大学名誉教授  
 吉田永弘 本学准教授  
 川上薬 本学名誉教授

柳田征司 奈良大学教授  
 湯沢質幸 京都女子大学教授  
 遠藤和夫 本学教授  
 カイザー・シユテファン 筑波大学教授  
 アルド・トリートニ ヴェネツィア(カ・フオスカリ)大学  
 東アジア研究所准教授  
 月本雅幸 東京大学大学院教授  
 小島幸枝 獨協大学名誉教授  
 柏原司郎 東海大学名誉教授  
 彦坂佳宣 立命館大学教授  
 江端義夫 広島大学名誉教授  
 田中章夫 台北・東呉大学客員教授  
 真田信治 大阪大学大学院教授  
 久野マリ子 本学教授  
 中村幸弘 國學院大學栃木短期大学教授  
 本学名誉教授  
 小林國雄 日本国語教育学会常任理事  
 本学教授  
 諸星美智直 本学教授  
 泉文明 龍谷大学准教授

# 表記と表現

## —万葉集における多義性用字法の分析—

アルド・トリーニ

### 1. 言葉と文化：大和と大陸

日本の古代表記を対象とする研究が多数ある中で、8世紀の最初の長いテキスト、特に『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』にある文字の使用（用字法）に関する研究は興味深い。その当時のテキストには、初期の文字の実験的な使用を越えた、安定した表記の形を創り出す試みもされたに違いない。

先に記した3つのテキストの中でも、『万葉集』は、用字法の種類の多さなど、ユニークな、美を表したテキストであることは、専門家の間でも広く認められている。『万葉集』は歌集であり、日本人の歌の心、言い換えれば、日本の文化そのものを未来の世に伝えようとしている作品である。

中国から渡来した文字は、日本では、色々な点で異なり、自由自在に使われる場合もある。その理由はさまざまであるが、一つは、歴史学者の津田左右吉が指摘しているように、日本は外の文化と接するときに、新しい文化の要素を取り入れながら、その刺激の反応として、日本固有の伝統文化を主張したり、新しい伝統を作り出すことにあるのではないだろうか。その一例として、奈良時代の文明開化が挙げられる。新しい伝統を作り出すときには、独自の表現が大事であり、それは言葉や文字の用法にも関わってくるからである。

大陸の文化を摂取した奈良時代に、日本人は『古事記』、『懐風藻』、『日本書紀』、『万葉集』のような傑作を生み出し、その中でも、『古事記』と『万葉集』は日本人の自国語で書かれている。つまり、この2つのテキストはそれまでの口頭の伝統的な文化を文字で書きとめた作品である。当時の日本人が、中国の言語や文字を使って、自国語を書き表したことは、簡単なことではなかったであろう。漢文に訓点をつけ、あるいは自国語の要素を入れ、日本語で書いたり、読んだりしていた。また、中国の文字（漢字）を音声文字として利用することによって、全く違う方法で、自分の言語を書くことができたのである。

万葉仮名の場合、使用された字は音声の役割だけでなく、その文字の持つてい

る意味にも影響され  
つもしくはそれ以上  
を書き「春」を意味  
れる。和訓の場合、

以上の例から、中  
本人の心情などを表  
特徴を生かし、その  
中国文化と日本文化  
この融合のプロセス  
そして、漢文や文字  
たのである。

大陸から入ってき  
る程度自由に使用さ  
和訓も定着しておら  
ば、「アフ」は「逢」  
「マデ」は「萬代」、  
らは皆、「変体和訓」  
は、単純に「変体和

西条氏は<sup>(1)</sup>、声の  
ことが、もうひとつ  
明してみせた」と言  
する方法を加え、歌  
そこには、「目で見  
じてくる。歌の全体  
になる。その当時の  
の美に貢献できるか

平安時代に入って  
化は大いに美の役書  
生まれた。

### 2. 多義性とは

言語と表記の間に  
に複数（二重）の意  
表語文字（漢字）  
るが、普通、この  
読みがあり、「やま

る意味にも影響された。これをうまく利用し、一字、または二字以上の文字に二つもしくはそれ以上の意味を持たせることができた。たとえば、同音字の「張」を書き「春」を意味する。また「都」の変わりに「美夜古」を書くなどがあげられる。和訓の場合、関連する意味の「寒」を書いて、「冬」と読む例などがある。

以上の例から、中国の文字を借り、多様な用法を使い、日本の言語、文化、日本人の心情などを表現しようとしたことがわかる。大陸の言語とは違う日本語の特徴を生かし、その独自性を表わそうとした。つまり、大陸の文字や言葉を使い、中国文化と日本文化を「融合」させたとも言える。中国文化の物まねではなく、この融合のプロセスの中で、創意に富んだ要素が豊富に生み出されたのである。そして、漢文や文字を導入するとともに、その中から独特な応用の方法を見出したのである。

大陸から入ってきた漢字の使用は、初期の時代、まだ標準化されておらず、ある程度自由に使用され、奈良時代の作品には、創造的な用字法がみられる。また和訓も定着しておらず、一単語に対して、複数の漢字の使用がみられる。たとえば、「アフ」は「逢」、「相」、「遭」、「合」、「ココロ」は「心」、「意」、「情」、「神」、「マデ」は「萬代」、「左右」、「二手」、「及」、「至」、「迄」、「左右手」など。これらは皆、「変体和訓」と呼ばれている。しかし、「張」を「ハル=春」と読む場合は、単純に「変体和訓」とはいえないだろう。

西条氏は<sup>(1)</sup>、声の歌から文字の歌へ移行する過程で、「(人麻呂は、)歌を書くことが、もうひとつの可能性を秘めた創造行為であることを、十分すぎるほど証明してみせた」と言っている。耳から入る歌を書くとき、もうひとつの美を表現する方法を加え、歌の魅力を高めることができるようになったと言える。そして、そこには、「目で見えるものとして享受される」と同時に、歌の意味の多重性が生じてくる。歌の全体の意味がより深くなり、耳、目、心の鑑賞が実現されるようになる。その当時の歌人は「歌を書く」作業にあたって、文字化がどのように歌の美に貢献できるかということに気にかけていたのではないだろうか。

平安時代に入ってから、かな文字が発達し、勅撰和歌集の繁栄期に、歌の文字化は大いに美の役割を果たし、仮名書きは目に訴え、「見る歌」としての傑作が生まれた。

## 2. 多義性とは

言語と表記の間には「多義性」が生じる。つまり、一つのテキスト（文字列）に複数（二重）の意味が起りうるということである。

表語文字（漢字）には、形（字形）、音（読み）、義（意味）の3つの要素があるが、普通、この3つの要素は一致する。たとえば、「山」には「ヤマ」という読みがあり、「やま」という意味がある。しかし、漢字の長い変遷の歴史を振り

返ってみれば、3つの要素の互いの関係は時代により、または場所により、多少の変化が見られる。日本に入ってから、特に和訓を与えることによって、中国からの文字は意味や用法が変わった。大陸の文化、環境、社会、習慣とは違うので、当然、漢字の意味も違ってくる。この差異は、万葉歌にみられる漢字の特殊な使用法、つまり「修辞学上の使用 (rhetoric use)」とは違う。しかし、いずれの場合も、必ずしも、その相違ははっきりしたものではなく、曖昧な例も少なくない。「修辞学上の使用」は「変体和訓」とは異なり、多くの場合、意味が推測できる。遊戯的なものではなく、二重の意味のストラテジーをうまく利用し、歌意に貢献し、歌の雰囲気や感情をより豊かにする。例えば、なくなった妻の悲しみを歌う 482 番歌 (「打背見乃 世之事尔在者 外尔見之 山矣耶今者 因香跡思波牟」) の「打背見」(うつせみ=空蟬) は、この世のはかなさを表すのみならず、「背子が打たれたことを見た」という意味にかけ、歌意は深まり、悲しみを具体的に表している。また、「思波牟」(おもはむ=思わむ) の「波」(=は) は、悲しい思いが心の中に波のように消えずいつまでも繰り返すことを表している。

『万葉集』の時代には、漢字の自由な使い方があったが、散文と韻文の用字法にはかなりの違いが目立つ。テキストの内容、重要度、趣旨、読み手により、当然文体は違ってくる。『古事記』には、時代を越えた、当時の社会に限らず、長い年月に渡って、多くの人々に、伝達ができるような用字法を使っている。それに対して、『万葉集』の用字法は、中国の影響を受けながらも、基本的に、日本人の心、その当時の社会 (公家社会) の価値観を中心にした、「美」に訴えるような用字法である。

韻文は、美しく巧みな言葉で飾って表現する修辞法だけではなく、多様なストラテジーを使い、できるかぎり深い意味を伝えようとする。限られた文字 (音節) 数に、複数の意味を持たせて表現する必要性が求められた万葉歌人にとっては、柔軟性に富んだ道具、それが、中国から入ってきた文字であったのである。一般的に、コードが複雑であればあるほど、意味も複雑になり、多義性を伴い、多くの可能性を含んでいる。つまり、コードの複雑さは、意味論上の複雑さと正比例の関係を持つ。奈良時代に中国から入ってきた漢字体系は大変複雑なコードであり、表現に隠された多くの可能性を持っていた。万葉時代の表記体系は、先に述べたように、まだ完全に標準化されておらず、大陸の文化として文字を使い、文化シフトの曖昧さの中、自由性が効く漢字が言語の優れた道具であったに違いない。

多義性のある用字法は、まだ標準化されていない時代に限らず、日本語の表記の歴史において各時代に生じた現象といえる。煙草 (タバコ)、護美 (ゴミ) などのような「義訓」はいくつかあるが、万葉集のように多量に、巧みに、複数の意味に使われている例は他にないといえよう。

### 3. 音声チャンネルと

多義性は、表記テキストとつ以上同時に違う感覚の場合、この多義性は視覚的漢字レベルでは、「音覚で捉える「意味 1」」

以下にいくつか例を

例 1 万葉集、529 番  
張：「音：ハ  
膨らむ」

例 2 万葉集、1844  
《冬が過ぎて、  
寒：「義 1：冬  
暖：「義 1：春  
来良思：(春

例 3 万葉集、560 番  
孤悲：「音：  
死牟：「音：

例 4 万葉集、2991  
異母：「義 1

例 5 万葉集、293 番  
吉美：「音：

例 6 万葉集、4215  
痛念：「義 1

例 7 万葉集、1804  
悲悽：「義 1

### 3. 音声チャンネルと視覚チャンネル

多義性は、表記テキストと音声テキスト（読み）の間に生じるものなので、ひとつ以上同時に違う感覚に訴える意味理解のチャンネルが利用できる。多くの場合、この多義性は視覚チャンネルと音声チャンネルの間に生じる。

漢字レベルでは、「音」と「意味」、又は「意味1」と「意味2」が重なり、視覚で捉える「意味1」を音声化するとき、音から区別する「意味2」に分かれる。

以下にいくつか例を挙げる。

- 例1 万葉集、529番の歌：「張之来者」（はるしきたらば）《春が来れば》。  
張：「音：ハル」、「義1：春（蕾が膨らむ時期）」、「義2：張る（蕾が膨らむ）」
- 例2 万葉集、1844番の歌：「寒過暖来良思」（ふゆすぎてはるきたるらし）  
《冬が過ぎて、春が来るとみえる》。  
寒：「義1：寒い」、「義2：冬」  
暖：「義1：暖かい」、「義2：春」  
来良思：（春が）来ることは良い思いがする
- 例3 万葉集、560番の歌：「孤悲死牟」（こひしなむ）《恋しているよ》。  
孤悲：「音：コヒ」、「義1：恋」、「義2：一人で悲しむ」  
死牟：「音：シナム」、「義1：しぬだろう」、「義2：死を求める」
- 例4 万葉集、2991番の歌：「異母」（いも）《妹》。  
異母：「義1：妹」、「義2：異なる母」
- 例5 万葉集、293番の歌：「吉美」（きみ）《君》。  
吉美：「音：キミ」、「義1：君」、「義2：よくて、美しい」
- 例6 万葉集、4215番の歌：「痛念」（なげく）《嘆く》。  
痛念：「義1：嘆く」、「義2：つらい思い」
- 例7 万葉集、1804番の歌：「悲懐」（なげく）《嘆く》。  
悲懐：「義1：嘆く」、「義2：悲しくてつらい」

- 例 8 万葉集、4395番の歌：「佐久良」(さくら)《桜》。  
佐久良：「音：サクラ」、「義 1：桜」、「義 2：佐 (音声文字) + 久しくよい」
- 例 9 万葉集、3309番の歌：「作樂花」(さくらばな)《桜花》。  
作樂花：「音：サクラバナ」、「義 1：桜花」、「義 2：樂をなす花」
- 例 10 万葉集、4083番の歌：「美夜古欲里」(みやこより)《都より》。  
美夜古欲里：「音：ミヤコヨリ」、「義 1：都より」、「義 2：都の里が欲しい」
- 例 11 万葉集、2412番の歌：「戀無乏」(こひてすべなみ)《恋しても甲斐なし》。  
戀無乏：「義 1：恋しても甲斐なし」、「義 2：恋が慕わしくてもない」
- 例 12 万葉集、589番の歌：「不来家留」(こずける)《来なかった》。  
不来家留：「音：コズケル」、「義 1：来なかった」、「義 2：来なくて、(自分の) 家に留まる」
- 例 13 万葉集、2437番の歌：「隱障」(かくさふ)《隠す》。  
隱障：「義 1：繰り返し隠す」、「義 2：隠し障える」
- 例 14 万葉集、2102番の歌：「荒争」(あらそふ)《争う》。  
荒争：「義 1：争う」、「義 2：荒れて争う」
- 例 15 万葉集、2833番の歌：「多集」(すだく)《集く》。  
多集：「義 1：集く」、「義 2：多く集まる」
- 例 16 万葉集、3124番の歌：「(夜毛) 更深 (利)」((よも) ふけ (にけり))  
《夜が更ける》。  
更深：「義 1：夜が更ける」、「義 2：更けて深くなる」
- 例 17 万葉集、229番の歌：「苦流思」(くるし)《苦しい》。  
苦流思：「義 1：苦しい」、「義 2：苦しい思いが流れる」
- 例 18 万葉集、595番の歌：「念益十方」(おもひますとも)《思い増すよ》。  
念益十方：「義 1：思い増すよ」、「義 2：十方に思い (愛) が広がる」

- 例 19 万葉集、992番の歌：「見樂思好」(見樂思好)《見樂思好い》。  
見樂思好：「見樂思好い思いを起こす」
- 例 20 万葉集、1782番の歌：「沙汰が) 消え消失多列夜」(沙汰が) 消え
- 例 21 万葉集、1967番の歌：「遣悶流」(遣悶流)《遣悶流し》。  
遣悶流：「義 1：遣悶流し」、「義 2：遣悶流し」
- 例 22 万葉集、988番の歌：「落易」(落易)《落易し》。  
落易：「義 1：落易し」、「義 2：落易し」
- 例 23 万葉集、3097番の歌：「求食」(求食)《求食す》。  
求食：「義 1：求食す」、「義 2：求食す」
- 例 24 万葉集、927番の歌：「散動而」(散動而)《散動而す》。  
散動而：「義 1：散動而す」、「義 2：散動而す」
- 例 25 万葉集、1297番の歌：「丸雪」(丸雪)《丸雪す》。  
丸雪：「義 1：丸雪す」、「義 2：丸雪す」
- 例 26 万葉集、1327番の歌：「味試」(味試)《味試す》。  
味試：「義 1：味試す」、「義 2：味試す」
- 例 27 万葉集、2327番の歌：「疑意」(疑意)《疑意す》。  
疑意：「義 1：疑意す」、「義 2：疑意す」
- 例 28 万葉集、3837番の歌：「秋風」(秋風)《秋風す》。  
秋風：「義 1：秋風す」、「義 2：秋風す」

「秋風」は「白風」



- 例19 万葉集、992番の歌：「見樂思好」（みらくしよし）《見ることは楽しい》。  
見樂思好：「義1：見ることは楽しい」、「義2：見ることは楽しく、好い思いを起こす」
- 例20 万葉集、1782番の歌：「消失多列夜」（きえうせたれや）《（恋人からの沙汰が）消えてなくなる》。  
消失多列夜：「義1：（恋人からの沙汰が）消えてなくなる」、「義2：（沙汰が）消え失って、（一人で過ごす）夜の列なりが多い」
- 例21 万葉集、196番の歌：「遣悶流」（なぐさもる）《慰める》。  
遣悶流：「義1：慰める」、「義2：悶（もだえ）を流す」
- 例22 万葉集、988番の歌：「落易」（うつろふ）《（春草は）色あせる》。  
落易：「義1：（春草は）色あせる」、「義2：散りやすい」
- 例23 万葉集、3091番の歌：「求食」（あさり）《漁り》。  
求食：「義1：あさり（漁り）」、「義2：食物を探し求める」
- 例24 万葉集、927番の歌：「散動而」（さわぎて）《騒いで》。  
散動而：「義1：騒いで」、「義2：散り動いて」
- 例25 万葉集、1293番の歌：「丸雪」（あられ）《霰》。  
丸雪：「義1：あられ（霰）」、「義2：丸い雪」
- 例26 万葉集、1323番の歌：「味試」（なむ）《味を試す》。  
味試：「義1：なむ」、「義2：味を試す（嘗む）」
- 例27 万葉集、2324番の歌：「疑意」（かも）《かなあ》。  
疑意：「義1：かなあ」、「義2：疑問の意」
- 例28 万葉集、3832番の歌：「棘原」（うばら）《うばら》。  
棘原：「義1：うばら」、「義2：うばらの原」

「秋風」は「白風」（2016）、「金風」（2301）、「冷風」（2724）とある。

#### 4. 万葉集の用字法の研究

『万葉集』が完成して2世紀後、一般の人々は言うまでもなく、歌人の間でも、『万葉集』は解説できなかつた。951年に村上天皇が「和歌所」を設置し、源順(911-983)がその長に任命され、万葉歌の解説を試みた。しかし、13世紀初めまで解説された歌はわずか173首であった。

そのころ、「万葉集の用字法」という新しい研究分野も始まった。最初にこの研究を開拓した人は仙覚(1203-1272)であり、そのときから今日まで、「万葉集の用字法」の研究は盛んに行われてきた。

鎌倉時代から20世紀までの万葉集の用字法は、音声を表わす「音声文字」(真仮名または万葉仮名)と意味を表わす「表意文字」(正訓字)に分かれる。仙覚は「真名仮名」と「正字」、由阿(?-?)は「名仮名」と「通正字」、江戸時代の契沖(1640-1701)は「仮字」と「正字」、同時代の春登(1769-1836)は「仮字」と「訓語」、前世紀の橋本進吉(1882-1945)は「仮用」と「正用」、そして時枝誠記(1900-1967)は、今日よく使われる「表音」と「表意」文字というふうになづけた。

表意文字には、正訓字のほかに、「戯書」と「義訓」がある。「戯書」は「たわむれに書いた文・書物…特に書き手の遊戯的な意図や技巧の認められるもの」<sup>(2)</sup>である。例えば、2991番の歌にある「馬声蜂音」は「イブ」と読み、「馬声」は「イ」、「蜂音」は「ブ」と読む。

「義訓」は「本来の訓によってではなく、語の表す意味によって漢字をあてるもの」<sup>(3)</sup>と定義される。たとえば、「黄変」を「もみつ」、「数多」を「あまねし」、「無花果」を「いちじく」と読む例をあげることができる。

万葉集によく使用されている多義性のある用字法は、戯書か義訓とみなされ、その特性は認められていない。しかし、この用字法はテキストの理解に重要な役割を果たすので、軽視できない。

多義性の用字法の主な研究者の中では、吉澤義則(1933-)、高木市之助(1941-)、筏勲(1958-)、佐々木隆(1977-)、森山隆(1963-)、奥田俊博(1998-)、森本健吉(1933-)、森本治吉(1931-)が挙げられる。最近では、稲岡耕二(1976-)、古屋章(1998-)、奥田俊博(1998-)がその研究を行っている。

早くから多義性の用字法に注目した吉澤義則は、「戯書」が目に見える用字法で、「副次的意義によって、それぞれに主意義を拡充しているのである」と述べた上、文字の「文学的用法」と主張する。高木は吉澤の研究に沿い、「変字法」と名づけた。そして、文字の視覚的な用法は、日本古代文学作品の新たな解釈に貢献できると述べている。佐々木は「歌意とその表記とのかかわり」につ

いて、語義と  
本稿では、万  
義性の用字法  
稲岡<sup>(4)</sup>もこ  
「非対応訓」と  
な緊密な関係  
との間にずれ  
ネモコロ、「無  
を取り上げて  
ると稲岡は述  
らかではない  
訓と認めたほ  
奥田は「表

- 1. 語義に
- 2. 歌中の
- 3. 歌の内

1. は実際に  
の互いの関係  
にある漢字と

#### 5. 「多義性」

奥田の分類

- 1. 範列連係
- 2. 連辞連係
- 3. 歌中の

1. 範列連係  
「寒」(存  
だが、頭の  
書く。

- 2. 連辞連係  
暖来良思

いて、語義と字義の相互関係に注目し、内的意味と外的意味に分けて論じている。本稿では、万葉集における多義性をもたらす特別な表記のストラテジーを、「多義性の用字法」と呼ぶことにする。

稲岡<sup>(4)</sup>もこの特別な表記のストラテジーに気づき、「非対応訓」と名づけた。「非対応訓」というのは、漢字とその訓に当たるものとの間に普通の和訓のような緊密な関係が認められるのではなく、元の字義と歌の中でその字が表わす言葉との間にずれが生じることである。たとえば、稲岡は、「脊」=コフ、「心哀」=ネモコロ、「無之」=スベナシ、「丸雪」=アラレ、「未通女」=ヲトメという例を取り上げている。この「非対応訓」の働きは歌の表現を深め、意味を豊富にすると稲岡は述べている。Lurie<sup>(5)</sup>は「非対応訓」とそうでない訓との関係はあきらかではないと述べているが、確かに、普通の和訓とは性質が異なり、特別な和訓と認めたほうがいいだろう。

奥田は「表意性を有する仮名表記」と名づけ、以下の三種類に分けている。<sup>(6)</sup>

1. 語義に対する意識を反映した仮名
2. 歌中の用字と意味的に対応する仮名
3. 歌の内容に対応する仮名

1. は実際に歌にある文字（存在文字）と歌にないが浮んでくる文字（不在文字）の互いの関係を示している。2. は歌中にある漢字の相互関係を表し、3. は歌中にある漢字とその歌の全体の意味を表す。

##### 5. 「多義性をもたらす用字法」の分類の考察

奥田の分類した上記の三点は次のように言い換えることができよう。

1. 範列関係 (paradigmatic relation)
2. 連辞関係 (syntagmatic relation)
3. 歌中の意味との関係

##### 1. 範列関係（歌にある字が歌の中にない、ほかの字と関連する）

「寒」（存在）を書いて「冬」と読む。「冬」という字（または語彙）は不在だが、頭の中に浮かんでくる意味を表わす。つまり「冬」の変わりに「寒」を書く。

##### 2. 連辞関係（歌にある字が歌の中にある、ほかの字と関連する）

暖来良思→「良思」=「良い思い」は「暖」（=春）と関連する。どちらも

存在する。

ここでは 1 の範列連係 (paradigmatic relation) に絞って話しを進めていきたい。

範列連係とは、実際に歌の中にある文字の意味と同時に浮かんでくる意味の互いの関係を明らかにするものである。漢字言葉に重なる意味は、その漢字言葉の表現、内容、用字法から生まれる。従って、多義性の分析は表現、内容、時には用字法に基づくことになる。

漢字は伝統的に「形・音・義」の 3 つの要素からなる文字とされているので、多義性を起こす場合は、次の 3 つに分けられる。

1. 意味上の関係、すなわち異なる漢字を連想 (異字転義)
2. 音声上の関係、すなわち異なる漢字と同じ読み (異字同音)
3. 形上の関係、すなわち異なる漢字に似た形 (異字似形)

また、読まない漢字の場合は「冗長の字」と考えられる。

## 6. 多義性のストラテジーの分析

多義性はどう生じるのか、どのような種類があるのか、万葉集の例を取り上げながら、分析してみよう。

多義性のストラテジーは概して漢字の二つの基本的な用字法に分けられる。1. 真仮名 (万葉仮名) と 2. 真名 (正訓字) である。真仮名は音声 (表音) 文字なので、音声上、二重の意味が生じる。それに対して、真名は表意文字として、意味上、二重の意味が生じる。文字使用には音声か意味を表す二つの使い方があるので、読みと意味の間に二重の意味が生じる。

漢字は表意文字として、形 (字形)、音 (読み)、義 (意味) の三要素で成り立っている。この三要素の間に、同性・異性<sup>(7)</sup> (または関連・連想) により、二重の意味が成り立つ。たとえば、真仮名の二重の意味は、基本的に、異形・同音・異義であり、真名の場合、基本的に、異形・異音・同義である。

漢字の三要素と両性 (同性・異性) の組み合わせはさまざまある。稀ではあるが、同形 (多くは似た形) に基づく二字の関係の例もみられる。

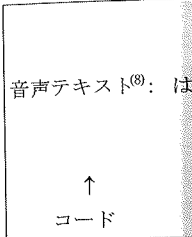
### 2 例の分析

1. 真仮名 (万葉仮名。音声文字) : 借音・借訓 → 読みの意味 (1) と漢字の意味 (2)。例: (張 → 春)

la as

異形・同音・

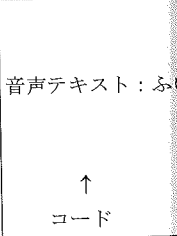
「佐保河乃 涙  
(さほがはの  
らば たちかく



春に、蕾が膨ら  
「春と花」の二  
読み手は、歌の

2. 真名 (表意)
- 異形・異音

「寒過 暖来」  
(ふゆすぎて

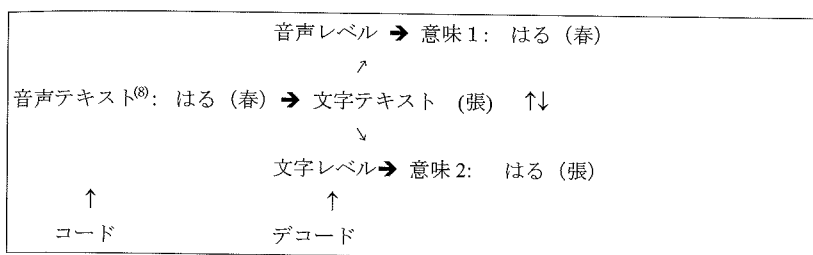


「冬」と「寒

以上の関係はpn

異形・同音・異義

「佐保河乃 涯之官能 少歴木莫莉焉 在乍毛 張之来者 立隠金」(529)  
 (さほがはの きしのつかさの しばなかりそね ありつつも はるしきたらば たちかくるがね)

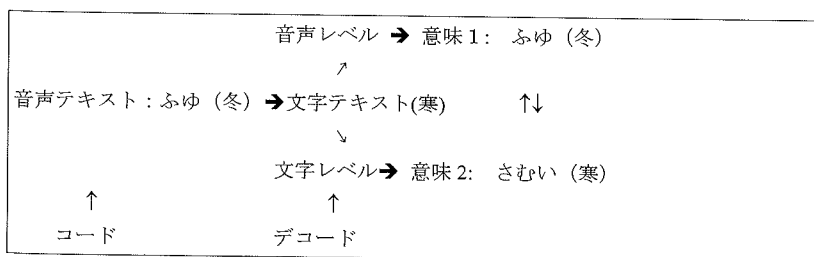


春に、蕾が膨らみ(張る)、花が咲く。「春」と「張る」は連想し、読み手に「春と花」の二つの意味が同時に浮んでくる。

読み手は、歌の文脈から「張」=「春」と推測できる。

2. 真名(表意文字)。漢字の実義(1)と隠喩の意味(2)。例:(寒→冬)  
 異形・異音・同義(連想)

「寒過 暖来良思 朝烏指 滓鹿能山尔 霞軽引」(1844)  
 (ふゆすぎて はるきたるらし あさひさす かすがのやま)



「冬」と「寒さ」の二重の意味が読み手に同時に浮んでくる。

以上の関係は *praesentia/absentia* (存在・不在) 関係に基づいている。

関係	音・義・形 関係	用字法	例	
			存在 <i>in praesentia</i>	不在 <i>in absentia</i>
音	同音異義 または 同音転義	fonetic (音字)	張 → 春 (n.529)	
			美夜古 → 都 (n.808)	
			山常庭 → 大和には (n.2)	
			孤悲 → 恋 (n.102)	
			不来家留 → 来ずける (n.589)	
			加欲波久 → かよはく (n.113)	
			於富吉美 → おほきみ (n.239)	
			痛毛為便無見 → いたもすべなみ (n.593)	
			消失多列夜 → きえうせたれや (n.1782)	
			見樂思好 → みらくしよし (n.992)	
			念益十方 → おもひますとも (n.595)	
			苦流思 → くるし (n.229)	
			義	異音同義 または 異音転義
寒 → 冬 (n.1844)				
未通女 → 乙女 (n.366)				
冬風 → 嵐 (n.1660)				
軽引 → 棚引く (n.1845)				
疑意 → かも (疑問) (n.2324)				
味試 → なむ (嘗む) (n.1323)				
丸雪 → 霰 (n.1293)				
散動而 → さわぎて(騒いで) (n.927)				
求食 → あさり (漁り) (n.3091)				
落易 → うつろふ (n.988)				
遣悶流 → なぐさもる (n.196)				
多集 → すだく(集く) (n.2833)				
形	同音異形	graphic (字形)	戀度 → 戀渡 (n.597)	
			冬木成春 <sup>9)</sup> → 冬篋り春(冬木盛)春 (n.16)	
冗長	冗字同義	redundan cy (冗字)	闇夜 → 闇 (n.2664)	
			紫草 → 紫 (n.21)	
			最愛子 → 愛子 (n.1209)	
			荒争 → あらそふ (n.2102)	
			隠障 → かくさふ (n.2437)	
			棘原 → うばら (n.3832)	
			更深(利) → (夜も)ふけ(にけり) (n.3124)	
混交	同音同義 (異形)	色々	為形 → 姿 (同音同義) (n.602)	

まとめ

万葉集における用字法は、国語学者の間で継がれた歌を初めてきかないことに気づきながら、歌意をよ転諭、言い換え、隠した。

中国の文字を使い体系は非常に複雑だを使いより深く、意今までは、この多れていなかったが、でいる。この分野にれていない言語的な貢献するのみならずころにある。

参考文献 (五十音順)

- 青木和夫、大野晋、中 10月) 2-15頁
- 筏敷「変字法より観た 頁
- 板垣徹『万葉表記・文
- 稲岡耕二『万葉表記論
- 稲岡耕二「万麻呂にお
- 乾善彦「万葉用字法体
- 学史研究』No. 39、199
- 今野真二『仮名表記論
- 大野透『万葉仮名の研
- 奥田俊博「『万葉集』の
- 平成10年8月) 1-13頁
- 奥田俊博「『万葉集』調
- 48頁
- 沖森卓也『日本古代の
- 菊川恵三「古今集と万
- 月) 142-147頁
- 工藤力男『日本語学の

## まとめ

万葉集における用字法は、日本文学作品の中では、きわめて複雑だということは、国語学者の間では周知のことである。当時の歌人は、それまでに口頭で受け継がれた歌を初めて文字で書きとめる試みをした。音のリズムは文字では表現できないことに気づき、文字の潜在的なゆたかさを生かして、多数の修辞法を利用しながら、歌意をより深く、豊富にするために、意味的関連、換言、意味の増幅、転喩、言い換え、隠喩、換喩、提喩などの用字法をストラテジーとして利用した。

中国の文字を使い、伝統的な大和の心を伝えようとしたのである。漢字の表記体系は非常に複雑だが、その複雑さには潜在的に可能性が多くある。複雑な表記を使いより深く、意味の富んだ表現を生んだ。

今までは、この多義性の特別な用字法のストラテジーには、あまり関心がもたれていなかったが、最近になって、歌意の解釈上の価値が認められ、研究が進んでいる。この分野には色々なアプローチができるが、本稿では、まだ十分に行われていない言語的な側面から分析を試みた。この研究の目的は、万葉歌の解釈に貢献するのみならず、より広い視野で、表記と表現、その相互関係に注目するところにある。

### 参考文献（五十音順）

- 青木和夫、大野晋、中西進ほか「古代日本人のことばと文字」（『言語生活』No. 292、1976年10月）2-15頁
- 筏敷「変字法より観たる万葉集の表記法の問題」（『国語国文』27巻11号、1958年11月）57-66頁
- 板垣徹『万葉表記・文体論叢』（近代文芸社、1992年3月）
- 稲岡耕二『万葉表記論』（塙書房、1976年11月）
- 稲岡耕二「人麻呂における歌の変革」（『国語と国文学』78巻11号、2001年11月）
- 乾善彦「万葉用字法体系研究史の残したもの—「仮名」の定位と国語文字史研究の方向」（『文学史研究』No. 39、1998年12月）
- 今野真二『仮名表記論攷』（清文堂出版、2001年1月）
- 大野透『万葉仮名の研究』（高山本店、1977年3月）
- 奥田俊博「『万葉集』の仮名表記—表意性を有する例を中心に」（『日本語と日本文学』No. 27、平成10年8月）1-13頁
- 奥田俊博「『万葉集』訓字主体表記巻における懸詞の表記」（『萬葉』167号、1998年11月）31-48頁
- 沖森卓也『日本古代の表記と文体』（吉川弘文館、2000年5月）
- 菊川恵三「古今集と万葉集—漢字とかなを中心に」（『国文学解釈と鑑賞』62巻8号、1997年8月）142-147頁
- 工藤力男『日本語学の方法—工藤力男著述選』（汲古書院、2005年11月）

- 河野六郎 (他) 『文字』 (『岩波講座 日本語』 第 8 卷 岩波書店 1977 年 3 月)
- 国語文字史研究会編 『国語文字史の研究』 9 卷 (和泉書院、2006 年 4 月)
- 瀬古確 『万葉集に於ける表現の研究』 (風間書房、1966 年 7 月)
- 瀬古確 『万葉集の表現』 (教育出版センター 1974 年)
- 藤堂明保 『漢語と日本語』 (秀英出版、1969 年 5 月)
- 中田祝夫 『音韻史・文字史』 (『講座国語史』 第 2 卷 大修館書店、1972 年 9 月)
- 中田祝夫 『日本の漢字』 (『日本語の世界』 第 4 卷 中央公論社、1982 年 6 月)
- 中村昭 『万葉集の表記・成立・文学』 (おうふう、2005 年 6 月)
- 古屋彰 『万葉集の表記と文字』 (和泉書院、1998 年 1 月)
- 前田富禎編 『国語文字史の研究』 5 卷 (和泉書院、2000 年 5 月)
- 森本治吉 『万葉集の研究 用字法を中心として』 (『岩波講座 日本文学』 第 6 輯、岩波書店 1931 年 6 月) 1-86 頁
- 森本健吉 『万葉集用字法概説』 (『万葉集講座』 第三卷 春陽堂 1933 年 6 月) 275-321 頁
- Lurie David, 「人麻呂歌集「略体」書記について—「非対応訓」論の見直しから」 (『国文学』 第 47 卷 4 号、2002 年 3 月) 107-113 頁
- Lotman Jurij, *The structure of the artistic text*, University of Michigan, Ann Arbor, 1977.
- Olson David R., "How writing represents speech", *Language and Communication. An Interdisciplinary Journal*, vol.13, n.1, January 1993, Pergamon Press.
- Yamada Toshio, *The Writing System: Historical Research and Modern Development Current Trends in Linguistics. II: "Linguistics in East Asia and South Asia"*, Mouton, The Hague-Paris, 1967.

## 注

- (1) 西条勉 「テキストとしての《集》—書く歌の自立について」 (『国文学』 第 47 卷 4 号、2002 年 3 月) 114-120 頁
- (2) 三省堂 『大辞林 第二版』
- (3) 同上
- (4) 稲岡耕二 「人麻呂における歌の変革」 (『国語と国文学』 第 78 卷 11 号、2001 年 11 月)
- (5) David Lurie 「人麻呂歌集「略体」書記について「非対応訓」論の見直しから」 (『国文学』 第 47 卷 4 号、2002 年 3 月) 107-113 頁
- (6) 奥田俊博 「『万葉集』の仮名表記 表意性を有する例を中心に」 (『日本語と日本文学』 No. 27、1998 年 8 月) 1-13 頁
- (7) 同性は同じ性質を有する意味で、たとえば、同音、同義などで、異性は「異」を有する性質の意味
- (8) 文字化にする前の口頭テキスト
- (9) 「冬木成春」には「成」は「盛」(もり)に関連する

## 方言波動

## 1. はじめに

1872年にWellentheorieが念ながら、日本では翻訳されたということであろう。19の『東北の方言』(1944年) J. Schmidtについても功績と東條操氏の「方言区画論」する企画が持ち上がり、『Wellentheorieの問題が焦点」いる。西洋の学会よりも10ととして何が帰結されるか。しむらくは小林好日氏の論られる。音韻推移の視点かた。

ところで、西欧では19世紀かんであったことが知られるわれている。ダーウィンの「系統樹説」を提唱した。印た。しかしそれは、方言のSchreierが1868年に早世し説と反対の学説を4年後に「(方言波動説)」である。それ地理的な空間や隣接地域の類語外の多様な事情を考慮しな一般化したのである。J. Sch



ISSN 0288-2051

平成十九年十一月十五日発行（毎月一回十五日発行）  
第一〇八卷 第十一号（通卷一二〇七号）  
昭和五十一年八月五日第三種郵便物認可

日本語学の諸問題

# 國學院雜誌

十 平成十九年  
一 月